

日本応用心理学会第 75 回大会企画ワークショップ

フィールドワークのミニ実習：構築主義的心理学への誘い

企画・司会：村本由紀子（横浜国立大学）

講師：箕浦康子（お茶の水女子大学名誉教授）

（司会）定刻となりましたので、大会企画ワークショップ 1 を開催いたします。横浜国立大学の村本と申します。大勢のみなさまにお集まりいただき、ありがとうございます。本日は、お茶の水女子大学名誉教授の箕浦康子先生をお迎えして、『フィールドワークのミニ実習：構築主義的心理学への誘い』というタイトルでお話いただきます。

箕浦先生は、京都大学をご卒業後、家庭裁判所の調査官を 11 年にわたってお務めになられ、その後アメリカに留学されて UCLA で文化人類学の Ph.D. を授与されました。ご帰国後まず岡山大学で社会心理学を教えられ、その後東京大学に移られて比較教育学、さらにお茶の水女子大学では臨床心理学の教鞭をとられました。このように先生のご専門範囲は極めて幅広く、学際的な視点に立ってご研究を続けておられます。

私自身も大学院生時代、1 年間にわたって先生のフィールドワークの実習授業に参加させていただきました。その授業の成果は、先生の編著による『フィールドワークの技法と実際：マイクロ・エスノグラフィー入門』として 1999 年にミネルヴァ書房から出版されています。近く、この本の続編といえる新しいフィールドワークのご本を出版予定と伺っております。

フィールドワークという研究手法は、人類学はもとより、今や心理学・社会学・教育学・経営学・看護学といった幅広い学問分野において重要な方法論になりつつあります。本日は短い時間ではございますが、先生のフィールドワーク実習授業を是非みなさまにも体験していただきたく、このワークショップを企画させていただきました。

では、箕浦先生、よろしくお願いいたします。

【1】 フィールドワークと構築主義

1.1 フィールドワークという手法

ご紹介にあずかりました箕浦でございます。「構築主義」という言葉をお聞きになったことがある方、ちょっと挙手願えますか？（数名の手が挙がる）そのことを聞いてらっしゃる方自身が少ないようですね。では、そのことを考慮しながら進めたいと思います。

まず、心理学ですと必ず「どういうふうにしてデータを取ってくるか」ということがありますね。質問紙調査をしたり観察をしたり面接をしたりして、データを取ってくる。本当はここ（現実）を知りたいわけですね。しかしここを直接つかむことはできないから、把握する方法として観察や質問紙調査などをするわけです。

フィールドワークでもここ（現実）をつかむのは難しいですが、従来の研究法と違うのは、「対象とする現実の中に入り込む」ことを試みることです。参与観察という手法は、文化人類学者のマリノフスキーが始めたものです。マリノフスキーはポーランド人で、イギリスの大学で社会人類学を学びました。東ニューギニアのトロブリアンド諸島でフィールドワーク中に第一次世界大戦が勃発し、ポーランドとイギリスは敵国同士になって、イギリスに帰れなくなって、フィールドに戦争が終わるまで住んだ。その間に彼がやった人々の生活に参加しながらデータを集める方法が、フィールドワークの原型になっています。重要なのは、フィールドに入って一緒に暮らし、そこで人々の振る舞いや感情のあり様を観察するということです。ところが、村ならそういうことができるかもしれませんが、都会でフィールドワークをしようとなると、同じことはできない

わけですね。学校などの場合、「フィールドワークさせてください」というと、「テストするんですか」とか「質問紙を配るんですか」とよくおっしゃられますが、フィールドワークは教室に入れてもらえさえすればできる。何がデータになるかという、フィールドで聞こえてきた話だとか、人々の振る舞いだとか、そこでの匂いだとか、五感を通して入ってくるもの全てです。そこに住む、そこにいることによって五感を通して入ってくるものがデータです。要するに始めから質問紙をしようとか面接しようとかそういうことを意図してないから、そこで聞こえてきたこと、心理学で一般にインフォーマル・データといわれているようなものが主なデータといえます。それをデータソースとして、ある程度のことをおさえたうえで、これ以上は人々がどう考えているか、心の中の問題やパーセプション（知覚）は分かりにくい、そういうときに、「会ってお話できますか」とアポを取ってフォーマル・インタビューをやりまします。

1.2 抽出され、再構成される「現実」

分析の対象はデータであるということは了解されたと思います。しかしながら、そのデータがこの現実と同一かどうかという、そうとは限りません。質問紙で取ったデータは、質問項目への答えでしかないし、決してここ（現実）ではない。それは、質問紙という方法で抽出した部分的な現実です。すなわち、「再構築された現実」です。

フィールドワークというのは、道具を使わないで、自分の五感を通じてデータ収集をしますから、多面的な、さまざまなデータが採集されます。それをフィールドノートに書く、そのフィールドノートがデータになる。しかしながら、フィールドワーカーが取ったデータというの、やはりその人が見た限りにおいての部分的現実で、あくまでも再構成されたものです。社会現実を全部とらえることはできません。今 2008 年の 9 月の東京という現実全部を生活しているかという絶対そんなことはないわけです。自分の小さなニッチの中で自分がパーセプション（知覚）しているとか、メディアを通じて知ったことから、それぞれの「思い込み」の世界をつくっているわけです。

【2】 フィールドワークの特徴

2.1 個体主義パラダイムからの脱却

フィールドワークの特徴は人間の営みのコンテクストをなるべく壊さない手続きで、生のリアリティからデータを抽出してくることです。もう一つは、個体主義パラダイムからの脱却です。心理学は、個人の言動を、どちらかという文脈から切り離れた形でデータ化しています。しかし、フィールドワークというのは、人々が生きている現実の文脈を共有することで五感を使ってデータを取ってくるわけです。人と人が生きている社会文化的文脈、そして当然 2008 年という日本の歴史の中の一時期に構成された現実の中で、データを取ることになります。

それから、もう一つ心理学の暗黙の前提として、私と環境を二元的・対立的に考えるのが一般的ですけれども、実際にわれわれ自身の生活というものを見た場合に、私の生活と環境は相互浸透し合っているわけです。生のリアリティに近いところに身を置いてデータを取ることによって、従来の個体主義パラダイムとか二元論的な研究でつくり上げられてきた理論について「おかしいんじゃないか？」と異議申し立てをなし得る面がある。従来の心理学は仮説検証型です。仮説が自分の取ってきたデータと照らしてみても真らしいかどうかを判定する資料としてデータが集められます。まっさらなデータが新しい理論を構築するための土台になることはあまりない。ところが、フィールドワークは生のリアリティから場を共有することで、データを取ってくる方法です。私は、心理学の中でも応用心理学というのは一番フィールドワークが使える分野だと思います。人々の生活の中でデータをどう取ってくるのが、基礎心理学とは違う応用たるゆえenですので、フィールドワークと応用心理学との近接性は非常に高い。ですから、村本さんのほうから「ワークショップやってください」と言われて、二つ返事で引き受けました。

2.2 フィールドワークのプロセス

では、実際にフィールドワークのプロセスはどんなふうになるのかということについてお話しします。まず、生活の場は「生のリアリティ」ですね、そしてそこの中に入り、場を共有して五感を働かせてデータを取ってくることを「フィールドワークをす

る」といいます。フィールドワークをした結果、フィールドノーツをつける。これが要するに「データの産出」の段階です。これが第一段階。

次いで「分析の段階」ですが、分析の対象になるのはフィールドノーツです。ですから、分析に耐えるだけの“厚い”フィールドノーツが書けなければ、まともな分析はできない。質問紙調査は、誰でもある程度の手順さえ踏めばある程度の研究らしきことができる。フィールドワークというのは、ある意味では、生のリアリティからどんなデータをとってくるかという“感性”の問題がからみます。目の前で進行中のことがよく見えない人がいます。「幼稚園に行き半日観察してきなさい」って言うても、「子どもが楽しく遊んでいました」だけで終わっちゃう学生がいました。それじゃダメなんです。ですから厚い記述ができるように訓練が必要です。

厚い記述がどういうことかについてはこの後みなさんに実習していただきますが、次に、フィールドノーツを分析するという作業があるわけです。フィールドノーツを分析している間もデータ収集は続きます。データ収集と分析が同時に進行することが、みなさんが知っていらっしゃる仮説検証型のやり方と違うところです。いったんフィールドノーツを分析すると、仮説というか「だいたいこういうことかな」という一つの線が出てくる。「じゃ、こういうことはどうなっているんだろう」と、新たな疑問も浮かぶ。新たな疑問が浮かんたら、新たな疑問を解くためにまたフィールドワークをやります。リサーチ・クエスチョンは、フィールドワークの途中に出てきて、そのフィールドノーツを書いているうちに、その積み重ねの中から新たな疑問が生まれて、リサーチ・クエスチョンが、変わっていきます。みなさんは、仮説をいったん立てたら、その仮説を動かしちゃいけないと習ったと思うのですが、そこが違うんです。

そして、最終的に「書き上げという段階」があるわけで、これを大体私は一年かけてやるんですね。まともなフィールドノーツを書けるようになるまでが半年で、フィールドノーツの分析というものをまた半年かけて教えて、うまくいくと一年間で学会誌への投稿論文が書けます。村本さんのように日本社会心理学会から着想独創賞を授与されるような論文も書けるわけですし、マスター論文も一年間で

書く学生は何人もいます。

訓練可能なフィールドワークの技法というのは、問いを発する力、リサーチ・クエスチョンを形成する力が一番重要ですね。観察、面接、フィールドノーツを書く、フィールドでの居方、だいたいこの辺までは前期に済みます。その先の分析・解釈・エスノグラフィーの書き上げが後期にやることです。今日は、問いを発する力というのと観察の基礎の部分みなさんに実習していただいて、フィールドワークという手法の特徴を把握していただければ、と思っております。

2.3 観察するという行為

観察するという行為は、よく見てよく聞いてよく記録するというに尽きますね。観察する行為は皆さんも普通に生活するなかで行っています。それを研究手法として精練したものです。観察するときは、相手がいる場に観察者もいるわけですから、観察されているということを相手が意識する、リアクト (react) するということがあるわけですね。家庭訪問で母子の観察をやらせていただくとか、あるいは保育園で子どもを見させていただくといった場合、始めのうちはどうしても、お母さんや保育士さんは観察者が入っているということを意識します。これが一つめの問題「reactivity への対処」です。何回か通ううちに相手は観察者を意識しなくなってきて自然なデータが採集できるようになります。

二つ目の問題は、あくまでも観察者の五感を通じてデータを取りますので、観察者がツールになる、そうすると、同じ場面であっても、A さんが見たものと B さんが見たものは違って来る、「オブザーバー・バイアス (observer bias)」が発生します。

三つ目の問題は、人々が生きている現場の中に入りますから、当然現在進行形の on-going な事象を観察することになります。オンゴーイングの事象というのは、1 回きりの事象ですから、もう一度同じ手続きでやって同じことが起こることを確かめるとか、そういうようなことはできないわけですね。そのため、信頼性という意味では問題がある。しかし、現実の中に入りますから、データと現実とのフィット (fit) の具合はよい、すなわち、フィールドワークは、妥当ではあるが信頼性に問題がある手法といえます。観察に伴うこれら三つのマイナスをどんなふうにして減らしながらデータを蓄積してい

くかが、問題になるわけです。

よく見てよく観察するためには、リサーチ・クエスチョン(why)と観察すべき what, how を決めることが必要になります。観察記録を作る方法の第一は、起こったこと・見たことを、とまかくできるだけ記録するという、ジャーナル・スタイルと言われているものです。第二に、心理学でよく使われるのはタイム・サンプリングと言われているもので、一分ごとにその場面で何が起こっていたかを見てみるというやり方です。1分ごとであったり5分ごとであったり、タイムをどのように切るかというのは研究対象との関係で決まってきます。第三に、イベント・サンプリングという方法があります。例えば、子どもが泣き出すというイベントに着目して、データを集めるやり方です。

【3】 フィールドワークのミニ実習

3.1 ビデオ観察 (1 回目): 全体観察

ではこれから、ある児童公園で私が撮ったビデオを 10 分間ほど見ていただきます。

生活の場面でフィールドワークするというのは、例えばこういう子どもたちが遊んでいる児童公園に行ったらリアルタイムで観察するということです。今日は、みなさんにビデオを見ていただきますが、実際は、こういう生活の場面そのものをどういうふうにして分析するかということが、フィールドワークでは常に問題となります。

ここには 5 人の子どもが出てきます(画面を見ながら説明)。ここに写っているのがお母さんで、手を引いているちっちゃい子どもが 1 歳 7 カ月の弟、お兄ちゃんは 3 歳です。ブルーの服を着た子は、隣の家に住んでいるいとこです。そしてこの女の子もブルーの服を着た子と姉妹です。お父さん同志が兄弟で家が隣どうしで、きょうだいのようにして育てているそうです。これらのことは、ビデオを撮った後にこのお母さんに面接して分かりました。

(無音のビデオを鑑賞)

3.2 グループ討論 (1 回目): リサーチ・クエスチョンの選定

10 分たちましたので、ここで切ります。

前後の人と、3 人ずつくらいのグループを組んでください。今、ビデオを見ながら思い浮かべたことを出し合って、グループで一つリサーチ・クエス

ションを立てていただきます。そのリサーチ・クエスションを解くためには何を見るべきか、どのように見るべきか、どう記録するべきかについて話し合ってください。その後、もう一度同じビデオを再生しますので、今度はグループで決めたことに従ってデータを採取していただきます。

(司会: お話し合いの中で、先生にお聞きになりたいことがありましたら、いつでも手を挙げていただければと思います。)

(グループごとに自由討論)



3.3 ビデオ観察 (2 回目): 焦点観察

各グループで一つのリサーチ・クエスションが決まったと思います。では、もう一度再生いたします。

(再度、無音のビデオを鑑賞)

3.4 グループ討論 (2 回目): 観察結果のまとめ

それでは、各グループで、見たことを話し合ってください。各グループで発表していただこうと思います。

(グループごとに自由討論)

3.5 各グループの結果報告

では、どういうリサーチ・クエスションでどういうことが見えたかということを発表していただきます。1 グループ、2, 3 分くらいでご報告ください。

◆グループ 1

われわれは、あのすべり台遊びをしている子どもたちの中で、影響力を持っているのは誰かというクエスションを立てました。最も頻繁にすべっていた女の子がいたのですが、その子とさきほどの 5 人が混ざって遊んでいたのだろうと見ていました。

(箕浦: その子がモデルになっている?) はい。なぜかという、頻繁にすべっていたということと、そ

の子を見ている回数が多かったということです。(箕浦：誰が？ きょうだいたちがその子を見ているということですか？) ええ。きょうだいたちも、ほかの子も。

◆グループ2

3歳と1歳7カ月のきょうだいの関わりの違いが何かということ、それがリサーチ・クエスチョンです。お兄さんは他の子との関わりがあまりなくて、弟はエンジの服の子やブルーの子と一緒にいたりした。あと、お兄さんはほとんど泣いていました。すべり台も、仲間に入れてもらえず、お母さんが上に行ったり下に行ったりして迎えたりしているのを見て、訴えるような感じで泣いていました。弟のほうは、もっと本能的な感じがしたので、弟のほうがお母さんとの関わりが本能的で、お兄さんのほうが関係的という感じがしました。

◆グループ3

きょうだいが泣いたりしている葛藤場面を、お母さんがどのように調整しているかというのがリサーチ・クエスチョンでした。一つには、下の子も上の子もだっこしたりおんぶしたりして、スキンシップを使っている。それと、じゃんけんゲームみたいなものもやっている。それから、やっぱり何か教育したいというか、上の子には何とか自力でのぼってきなさいといって、解決させようとしている。下の子にもやらせるけれども、下の子の場合にはいつも後ろについているかっこうで、一緒にのぼっていく。それから、エンジの服を着た子はいとこだけれども、お母さんはその子と一緒に3人をうまく調整しながらやっていたなと。いとこの上の子、ブルーの服の女の子をうまくサポート資源として使いながらやっていたところがあると。

◆グループ4

リサーチ・クエスチョンは、お兄ちゃんの行動、母親を求めて泣き出したところの行動に着目しました。何を見たかというとき、まずお兄ちゃんが最初にすべり台にのぼったときの目線に注目しました。ついて行ってのぼった後は、母親を探している目線がありました。それから、お兄ちゃんが泣き出したときに母親がどこにいたかを見ると、弟のところにつきっきりでいたので、それでだんだん不安になってしまって泣き出してしまったし、また、母親と遊んでいる弟を見て、自分がちょっと一人残った感じに

なって泣き出したのではないかということで、そこに注目して見ていました。

◆グループ5

私たちは、きょうだいが母を求める行動ということで観察しました。1歳7カ月の弟くんは、結構泣いたりとか手を伸ばしたりとか目線で母を求めるとか、さまざまな行動を見せていたと思うんですけども、お兄さんのほうが、泣いて目線を送るという部分が多かったかなと思います。

◆グループ6

私たちは、なぜきょうだいの甘え行動がいとこに伝染したのかということに注目して見ていました。最初にお兄ちゃんが泣き出して、その後弟も泣き出したのですが、そのときにいとこの女の子が弟をなだめに行っていて、それがきっかけになって、兄と弟がお母さんのところに甘えに行ったときに自分も甘えさせてほしいというふうに行ったのではないかという感じで見てとらえていました。あと、ブルーの洋服を着ていたいとこのお姉ちゃんらしき子が常にお母さんの周りにいて、いとこの妹のほうをなだめたりとか、きょうだいの仲裁に入っていたりして、常にお母さんのサポート役みたいな役割を果たしていたんじゃないかというところが見えました。

◆グループ7

私たちのグループでは、お兄さんのすべり台遊びがだっこ遊びに変わったような印象を持っておりました。それで、すべり台遊びがだっこ遊びにいつ変わっていったのかに焦点を当てて見ました。最初お母さんが弟さんのほうをサポートしてすべり台の上ののぼったときに、お兄さんのほうがそれを見て、最初一人で遊んでいたのにそれを見て泣き出して、赤ちゃん帰りが始まった。その後も、お母さんが、しかたなく甘えを受け止める・おさめるのではなく、じゃんけんという遊びにどうやってそれを変えていくか…。

(箕浦：退行現象をね?) はい。そうことに焦点を当ててみた、ということです。

◆グループ8

一番基本のところとして、なぜ泣くのか、泣くタイミングとか泣く理由とかがどういうことだったのかというところで、その中で特に中心的にはお兄ちゃんのほうに注目をしながら観察しました。状況

として、お兄ちゃんは、最初は一人でのぼることができていたにもかかわらず、降りるのが怖かった。お母さんが一緒に降りてくれて、その後、下の子とお母さんが一緒にのぼって行ったら、後からついてきたのですが、自分だけ離されてしまって、泣き始めた。それがいちばん始めの泣き始めたところですが、そういう意味では、お母さんが自分の相手をしてくれないという不満、不安みたいなものが出発点でもあるんですけれども、それが、お母さんが一緒にのぼってくれても降りるときは一人だったということでは…。

(箕浦: お母さんは、2 回目は、兄を一人で滑らせたんだよね。一緒に降りてくれなかった。) お母さんに対する不安、不満もある一方で、一人でおる恐怖感もそこにまた加わってしまって、大泣きになってしまった。その後に面白かったのは、お母さんがすべり台に上がっているときに、下の子が泣き始めたのですが、始めはお母さんがいない場面でも泣きはしなかったのに、そこでお兄ちゃんと一緒に上がって行くのを見たときには泣き始めてしまった。そういうふうな形で二人最終的に泣き始めたのですが、その中で見えてきたものとしては、下の子と上の子に対して、お母さんは明らかにいろいろ細かいところで違う。一緒にのぼるという時点で、下の子は手を引いてのぼるけども、上の子のときにはちょっと横でサポートするだけで、触らない。そういうところの違いがあるということが、周辺情報としてはかなり見えてきました。

◆グループ 9

私たちのグループでも、きょうだい関係とお母さんとの関わりというのを見てきました。疑問としては、なぜお兄ちゃんが泣き出したのかという、そのスタート時点で注目して、その後もう一度見ながらリサーチ・クエスチョンを立てていこうという感じで見ていきました。

(箕浦: 要するに、お兄さんの心理をフォローしたわけね。) 最初に観察したときお兄さんはいつ降りてきたんだらうというのが見えていなかったのですが、後でもう一度見直してみると、お兄さんは実はお母さんと一緒に降りてきた。

(箕浦: 怖くて、上にずーっといるんだけど、お母さんがとうとう一緒に降りてくれたのね。最初はね。) はい。そのあと、弟のほうと一緒にお母さんが

上がろうとするんですけれども、そのときにお兄ちゃんが後ろからついてきて、いつのまにか弟やお母さんとの距離が少しずつ離れていくところでお兄さんが泣き出す、座り込んで動かなくなりました。最初に一人で降りてくるのが怖かったのか、とかいろいろ出てきたのですが、その中でやはり、お母さんとの関係性の中で出てきたのでは? ということがありました。そのあと、弟との三者の関係の中でそれが生まれてきたのか、それともお母さんとの二者関係の中で生まれてきたのかということについて、また新しいリサーチ・クエスチョンが立っていったということです。

3.6 観察実習の総括

みなさんは、多分「今みたビデオを分析してもらいます」って言ったときに、「えっ、これ分析できるの」って思ったのではないかと思います。生の現実場面そのものを分析することに戸惑いがあったと思います。今回のビデオは私のカメラワークで切り取られています。普通のフィールドワークでは全景が見えているはずですが、さらに、このビデオテープでは音が意図的に消されているわけです。言葉があると言葉に頼ってしまってよく見えないので、言葉を消して「見るだけ」で、どれだけ情報がとれるか体験してもらいました。たった 10 分ですが、相当いろんなことが見えてくるということがわかったと思います。

フィールドワークの基本は観察です。観察する対象は生活の場、これが今の場合だと児童公園ということになります。発表していただいたのは 9 グループですが、兄に焦点を当てる人、お母さんに焦点をあてて子どもとの関わりを見る人、いとこのエンジの服を着た子を見る人、他の子たちを見る人、いろいろありました。各グループのリサーチ・クエスチョンによって見えてきたものが違い、レポートが変わってきました。

ここで私が言いたいのは、現実というものの中にはものすごい数の情報が埋め込まれているということです。無数の情報の中から取捨選択して自分の研究関心のある情報をデータとして意識の中に取り入れている。興味の焦点を合わせる手段の一つがリサーチ・クエスチョンを立てて見るということなのです。

1 回目にみなさんによく見てくださいますよと言った

ときと、2 回目にリサーチ・クエスチョンを立てて見たときでは見えてきたものが変わってきませんでしたか？ どうですか？（参加者：変わったと思います。）

どんなふうになりましたか？（参加者：自分のテーマのところを中心にしているので、ほかのところがぼやけた感じ。）

あなたの場合、どうですか？（参加者：最初、リサーチ・クエスチョンがないときは、現象だけを受け入れて見ているような感じ。やはり焦点がないので、出てくる人の心理までは深く読めない部分があって。実際にリサーチ・クエスチョンを立てたとき、やはり今回の場合は立てないところであっても、どんな状況が心理なのかということが、よりクリアに把握できたと思います。）

時間の経過はどうですか？ そのお隣の方。（参加者：始めはとても長く感じたんですが、リサーチ・クエスチョンを立ててから見ると、見なくてはいけな部分の方がよりクリアになるので、とても短く感じました。）短く感じますよね。密度の濃い 10 分間になるわけですよね。

【4】 フィールドワークによる 「現実」の構築

4.1 リアリティ・リメイド（Reality Remade, 再構築された現実）

結局フィールドワークの基本は、全体観察をまずやって、その間にリサーチ・クエスチョンを立てる。リサーチ・クエスチョンを立てると、地と図の関係になって図が浮かび上がり、図の部分についての情報がたくさんとれるようになる。リサーチ・クエスチョンによって、認識できる現実も変わってくるということです。

「現実とはさまざまな相貌をみせるマルチなもの」です。ということは、リサーチ・クエスチョンによって、データとして取り込まれるものが変わってくるということです。同じフィルム、同じ映像を見ている、いとこの子に焦点を当てた場合、兄に焦点を当てた場合、お母さんに焦点を当てた場合などで、「どういうものを見ましたか」と言われたときの答えが変わってくる。つまり、取れるデータが変わるということです。非常にさまざまな情報が埋め込まれている現実から、「私」という研究者と観察と件

である児童公園との間の相互作用の中で、「ある現実」というものが構築されて、みなさんのレポートになったということなんです。これがいわゆる構築主義が考える「現実」です。

典型的な論理実証主義の世界では、ただ一つの客観的な現実というものがあって、その客観的な現実についての法則定立をめざす。誰が見ようとも同じに見える本質的なものとして外界を措定する。児童公園の映像を見た場合に、映像は同じだけれど、現実として取り出されてきたものは、みなさんがどういう問いをもって現実を見たかによって、違ってきたわけです。記録としてフィールドノーツに書かれるのは、観察者によって切り取られた部分的現実ということになります。それが「再構成された現実」ということなんです。フィールドワークは、誰が見ても同じように見える現実というものがあるという本質主義的な立場には立たないで、フィールドワーカーの焦点の当て方や問いによって見えてくるものは違うという立場に立っているわけです。

現実（リアリティ）というものは remade される。われわれは 2008 年の日本を全部生きているのではなくて、個々人が再構成した 2008 年の「私の世界」の中で生きている。「女性はかくあるべき」とか、「子どもはかくあるべき」とか、そういうものの考え方が成育途上で埋め込まれて、その中で自分の生を生きているわけです。女性はこうしなきゃだめだとか、男はこうあるべしとか、思い込まされて息苦しく感じることもある。そういう思い込みを壊して、作り直そうとしたのが、フェミニズムといわれているものです。教育学でもそういう考え方はあります。教育というものによってある一定の秩序、世界が作られている。学校はかくかくあるべし、先生はかくかくあるべし。けれども、それは制度、社会・文化によって構築されたもの、構築されたものならば、それを解体（脱構築）して作り変えることができると考えます。それがどういう社会的諸力によって構築されているかということを解き明かすことこそが研究であるという考え、これが批判的アプローチといわれているものです。

現実の把握様式、すなわち、私という認識主体が、世界というものをどのように認識するのか（認識論）と、現実をどのようなものと措定するのか（存在論）の組み合わせで、いくつかのメタアプローチ

表 1 三つのメタアプローチの比較 [Lecompte & Preissle (1993) をもとに箕浦が改変]

	論理実証主義アプローチ	解釈的アプローチ	批判的アプローチ
研究の目的	行動や社会を律している普遍的な法則の定立; 知見の一般化	特定状況における行動の規則性を理解し共有する; 知見の比較	結果を分析し, 不平等をあばき, 解放のスタンスを育む
研究の焦点	観察可能な行動に着目; 客観的に「測る」ことに力点	行動や状況に埋め込まれた意味に着目; 「分かる」ことに力点	不平等な社会構造や抑圧のパターンを「変えていく」ことに力点
研究のプロセス	条件統制をしてノイズを除去し, 因果関係を把握することが中心; 変数操作が主な研究技法	人と人, 人と状況やモノとの相互作用やそこで伝達される意味を分析, 理解することが中心	隠された権力による統制を明らかにする
研究者のスタンス	客観的であること; 研究対象者との間に距離を取る	調査参加者の居る場に参与; 主観的であることを厭わない	対象から学ぼうとする学習者, かつ批判的意識の覚醒を促す教師
対象者の位置づけ	研究者の指示に従う受動的な存在	能動的な協力者	一緒に学ぶ学習者, 研究者にとっての教師
主なデータ収集法	数量的データを得るための実験や調査	質的データを得るためのフィールドワーク	質的, 量的どちらのデータでも構わない

があります。現実を構築されたものとして見る (epistemological subjectivism) が, 現実そのものの実在は否定しない (ontological realism) のが解釈的アプローチと批判的アプローチの依拠する立場です。しかし, 認識する主体とは全く独立に out there に本質的な何か確かなものが存在するという立場 (epistemological objectivism と ontological realism の組合せ), そういう存在論と認識論に依拠する論理実証主義が心理学では支配的でした。

4.2 三つのメタアプローチ: 実証的・解釈的・批判的アプローチ

表 1 に挙げた三つは, 社会科学, 人間科学, 人間と社会を扱う学問が依拠している主要なメタアプローチ, 方法論です。メタアプローチには実証的アプローチと解釈的アプローチと批判的アプローチの三つがあって, 私は, フィールドワークを解釈的アプローチの立場に立ってやっています。

どの立場に立つかによって, 研究の目的が違ってきます。日本応用心理学会も基本的には実証的アプローチの立場の人が多く, 構築主義の方はほとんどいないようです。実証的アプローチでは, 人間行動を律する普遍的な法則を見つけようとしています。これは心理学の授業では一番始めに教えることだと思います。「心理学は人間行動の普遍的な法則を科学的な方法で見つけます」みたいなことを私も習いまし

た。が, そこから抜けるのにすごく苦労しました。

解釈的アプローチの研究目的は, 特定状況における人間行動の規則についての「理解」です。知見の一般化というのを求めるのではなく, 相手を理解するという。今日の例でいえば児童公園の中での出来事についていろんな理解の仕方があって, 知見をどこまで一般化できるかわかりません。あのビデオは 1980 年代に撮ったものです。お気づきになった方があるでしょうか。今回はどなたもおっしゃいませんでしたが, ビデオ映像はものすごく古いんです。このビデオは, 1980 年 4 月, まだテープレコーダーがとても大きい時代に, 教材のために撮らせてもらったのです。が, 今, 児童公園に行ったら, 全然違う光景が多分見られるだろうと思います。あんな石のすべり台があったら訴訟問題になるかもしれないと言われたこともあります。1980 年代の特定の状況においての母と子です。要するに, 解釈的アプローチが目指すのは, 特定状況における人間行動についての理解です。人間というものは, アメリカ人であろうとアフリカ人であろうとみんな共通する何かがあるのでそれを探る, そういうふうな思考を持たないで, 特定の歴史的・社会文化的文脈に置かれた人間を見ていくことに力点をおくのが解釈的アプローチです。

研究の焦点も三つのアプローチでは違います。実

証主義ではとにかく“測る”。質問紙を配るとか、5点評定法とかで測って数量化することに関心がある。解釈的アプローチは測ることはあまりしないんです。場合によってはすることもあります。基本的にはしない。一番の関心事は、状況に埋め込まれた意味を理解すること。今回もみなさんの発表の中で、弟の心理はどうなんだろうとか、いとこの小さい子が甘えに巻き込まれていくのはなぜだろうとかいうものがありました。それは「意味」を分かろうとしているのですよね。行動の意味であって、みなさんは“分かろう”としているわけです。“測ろう”とはしていない。お母さんは弟と兄にどのように異なった養育態度を見せたか、分かろうとしているわけです。測ることに力点を置くか、分かろうとするかに、二つのアプローチの違いがある。もう一つの批判的アプローチになると、不平等な立場にあるならそれを変えていこうとする立場です。「脱構築」していく、システムを変えていこうとする、そういう方向に力点があるわけです。

研究のプロセスも、実証的研究では、ご存知のとおり、因果関係を確定するために条件統制をしてノイズを除去して、クリアな結果を得る努力をします。それで「横浜国大の学生を対象にして出たデータというのは人類に共通する」みたいな論理を使って論文を書く（フロアから笑い）。しかし解釈的アプローチというのは、私が見たものについての限定的な理解をもとに、それがどこまで敷衍できるか知るには、もう一つのフィールドを見て、その共通性から推論する。データは、文脈と一体という立場です。批判的アプローチの場合には、不平等なポジションを取らせる社会状況を変えていくという志向性がありますので、社会運動論につながっていきます。途上国の開発支援の問題をやるときには、この辺が問題になりますが、今回は時間がないので割愛します。

研究者のスタンスも違い、実証的アプローチでは対象者を被験者や被調査者として扱います。研究者の教示に従ってくれないと困る、研究者の教示に従わない人はデータから除去されるわけです。みなさんやっていることだと思うのです（フロアから笑

い）。けれども、解釈的アプローチは対象者と場を共有し、研究対象の生活世界に参与する、研究者がさまざまな形で参与して、能動的な協力者になってもらうことをめざします。批判的アプローチでは、問題状況の理論的な解明は研究者が担うかもしれないけれども、現場のことをよく知っているのは現場の先生であったり当事者の農民であったりですから、その人たちからいろいろなことを学ぼうとする姿勢が研究者の側にある。このように、研究者と対象者の距離の取り方も三つのメタアプローチで非常に違っています。アクション・リサーチはこれから多分盛んになると思うのですが、批判的アプローチと近い関係にあるわけです。現状のまづいところに気がついてそれを変革していく、変革を助ける、批判的意識を覚醒するということですから。コンサルタントの立場で行われるアクション・リサーチもありますが、社会的の底辺にいる人のエンパワーメントを図ることを目指すアクション・リサーチでは、批判理論の立場に立つものが多いと思います。今日はこれについては詳しくお話しません。

時間がもうほとんどありませんけれども、みなさんに言いたいことは、「客観的な現実というものは本当にあるの？」と疑うことです。「みなさんが今まで集めてきたデータは一体何だったの？」ということですね。多分、この“データ”と言われているものは、現実を写した何かであると思っているけれども、本当は一部分の現実しか反映していない。フィールドワークも一部分の現実しか把握できないことは分かっている。が、再構成された現実というものをわれわれは分析しているのだ、と分かっているわけですね。それに対して論理実証主義は、真実をとらえることをめざし、ある種の虚構を分析しているにもかかわらず、正統な手続きを踏んで集めたデータは「真実」であると思い込む。真実を把握したと信じているだけじゃないかと、私は思うのです。論理実証主義のロジックが作り出した思い込みの世界の中で生きている立場だと思います。ちょっとアジェンダになりましたが（フロアから笑い）、長い間お付き合いいただき、ありがとうございました。